

# 心敬における「夕べの鐘」

伊藤伸江

## 一

連歌師心敬が宗匠として参加した、京都本能寺で張行された『落葉百韻』<sup>注1</sup>には、初折裏七・八句目に次のような付合が見られる。

あらましにさそはれそむる墨の袖 正頼

ゆふべの鐘の涙とふ聲

心敬

前句の「あらまし」とは、よりのぞましい生き方である出家の道に進む望み。「世をのがれたい気持ちに心が動かされ、墨染の僧衣をまとう身となっていたのだ」という前句に、夕暮れ時の鐘の、涙にくれる我身を訪れてくる声が聞こえてくると付けたものである。

『落葉百韻』の張行時期は、この百韻の主催者である日明上人が本能寺貫主となる康正二年（一四五六）以後、寛正六年（一四六五）までの時期と推定でき、心敬<sup>注2</sup>に関して言えば、五十一歳から六十歳の

時期である。長祿三年（一四五九）には和歌の師である正徹が没し、また応仁元年（一四六七）には、応仁の乱の混乱に都を立ち、関東在住となる。関東下向以前の、京都で盛んに連歌活動を行なった時期の作品である『落葉百韻』の付合に見られる「ゆふべの鐘」「涙とふ聲」といった言い回しには、心敬の創作における表現の特徴の一つが現れているように思われる。この論では、「夕べの鐘」の句を手がかりとして、心敬の連歌、和歌表現の特性を論じていきたい。<sup>注3</sup>

## 二

心敬が詠んだ「夕べの鐘」とは、寺院において時を知らせるために鳴らした鐘のうち、夕暮れ時につかれた鐘。夕暮れ時の薄暗さを「墨染」とも表現することから、『連珠合璧集』には「墨染トアラバ、夕べ」とあり、<sup>注4</sup>『落葉百韻』では、前句の「墨の袖」（墨染の袖）と

同意である<sup>注5</sup>)と付句の「ゆふべ」は寄合となつてゐる。また、後の例となるが、「行く秋の夕の鐘も心してけふの一日よながき日もかな」(邦高親王御集・九月尽・133)の歌によつてもわかるように、この鐘により闇がたれこめて世の光景が一変して行くという意識があつた。

さて、「夕べの鐘」に関して、和歌の用例を探すと、勅撰集においては『玉葉集』に一例、「山ふかみゆふべのかねのこゑつきて残る嵐の音ぞさびしき」(雑三・200・前大僧正慈順)が存するのみで、その他も『延文百首』に一例(寄鐘恋・290・源有光)、『頓阿勝負付歌合』に一例、『草根集』に十例、『常縁集』に一例、時代が下り『栢玉集』に三例(うち二例は同一歌)、『邦高親王御集』に一例、『雪玉集』に一例見られるのが主な出現例となる。だが、そうした乏しい用例の中、正徹の『草根集』の用例が十例と多いのは注目されよう。

加えて、「夕べの鐘」という表現は歌題にも存するが、歌題「夕鐘」の使用傾向を見ると、勅撰集では『風雅集』(雑中・「夕鐘を」・伏見院・凧)、私家集では『実兼集』に各一例、「嵐」と「鐘」を組み合わせた京極派的な詠風の和歌の題として出現する。その後、わずかに『草庵集』に一例見られた後は、やはり『草根集』に六例(内一例が「夕鐘」)使われ、『松下集』に三例(うち二例が「夕鐘」)使われ、さらにその後は『雪玉集』に「古寺夕鐘」の形で一例と、また

使用されなくなつていく。『草根集』では、「夕鐘」のみならず「夕鐘」「古寺夕鐘」「山寺夕鐘」「関路夕鐘」「旅行夕鐘」と、各所の夕暮れに鐘を添えた。より詳細な情景を表現する題として展開される。こうした傾向は、『松下集』の三例中に一例「行路夕鐘」があることで、弟子の正広に受け継がれている事がわかるが、正徹以前には管見に入らない。

これらの状況から見て、和歌における「夕べの鐘」のモチーフは、正徹が、特に関心を持って詠んだものであるととらえることができる。

『草根集』の「夕べの鐘」の語句を含む歌十例は、日次本で見れば、永享元年(一四二九)に二例、文安四年(一四四七)に一例、宝徳元年(一四四九)に三例、享徳二年(一四五二)に一例、長祿元年(一四五七)に一例、その他巻四、巻六の年次不詳の巻に各一例あり、現存詠草を見ても幅広い年代にかけて分布しており、おそらく生涯にわたり詠みおいていよう。正徹の歌と、その詠歌事情を見ると、次のようになる<sup>注6</sup>。

嵐ふく夕の鐘の声おちて松につれなき峯の白雪

(永享元年一月十日・畠山持純家人丸法楽・雪夕鐘・1168)

嵐ふく夕の鐘も行秋をしたふかたにや声なびくらん

(永享元年九月廿二日・畠山義忠家月次・鐘声送秋・1320)

しづかにて夕の鐘のことはりをき、いる、人や涙おつらん

(文安四年八月廿七日・小笠原浄元家月次・晩鐘・254)

待人もたのめすつるにあらざりし夕の鐘をさだかにぞ聞

(宝徳元年三月十三日・隠岐入道素珍家月次・契待恋・554)

山本の夕の鐘も霞消て寺の前田にかはづなくこゑ

(宝徳元年三月十八日・武田信賢家月次・夕田蛙・550)

野べの風軒の草ばを吹まよふ夕の鐘もこゑかろくして

(宝徳元年九月廿六日・武田信賢家月次・野亭聞鐘・559)

はつせ山江にこもらずはみわ川に夕のかねのこゑや聞えん

(享徳二年二月廿八日・赤松教貞家月次・古寺夕鐘・796)

鳥鳴て後にあふよの別路を夕のかねになさばうらみじ

(長祿元年四月十三日・畠山賢良家統歌・暁逢恋・975)

うかりけり誰が待里を契とて夕のかねに春の行らん

(卷四・暮春鐘・267)

そことなきゆふべの鐘のとをきにも先昔よと思ひいでつ、

(卷六・夕鐘・480)

さらに、『草根集』には、卷六に480から482の「夕鐘」題歌

そことなきゆふべの鐘のとをきにも先昔よと思ひいでつ、

夕暮の心の色をそめそをくつきはつる鐘の声の匂ひに

うしや今嶺の雲きえ鐘たえてゆふべの奥のくらき山里

がまとめて置かれており、歌の中に「夕べの鐘」という表現はないものの、「夕鐘」題歌

すむ人の衣におちて墨染の色をふかむる夕暮のかね

(宝徳元年五月八日・永泉庵法楽統歌・夕鐘・570)

があり、

夕まぐれ鐘つきとむる山陰に声うちいだす法ぞ聞ゆる

(康正元年二月廿六日・清水平等坊円秀月次・山寺夕鐘・879)

夕日さす杉村おほふ逢坂の関寺くらき鐘のこゑかな

(宝徳三年一月十七日・於洪川義鏡家・関路夕鐘・674)

峯こゆる袖の下よりつき出す鐘や千里の暮おほふらん

(長祿元年十二月十七日・山名政清家月次・旅行夕鐘・1015)

と夕べの鐘の鳴る状況をより細かく規定した題を持つ和歌も存した。これらの彼の和歌は、京極派和歌による風の音と響き合う鐘の音の描写を受け、「風吹く夕の鐘」というような表現をなしたり、鐘の音の音を「かろく」、「なびく」と見たり、また鐘を受けとめ聞く自らの心象風景へと観察を広げて行ったりしている。正徹は鐘の音に強い関心があり、鐘を詠む和歌が非常に多いのだが、その中で「夕べの鐘」を詠んだ和歌も、正徹独特の特異な表現を詠みこんだ和歌と言えるものであった。

続いて連歌における「夕べの鐘」の用例を見ると、こちらも多く

はなく、『紫野千句』、『菟玖波集』に一例ずつ存した後、『竹林抄』、『新撰菟玖波集』ととりあげられていく。この時、『竹林抄』の例は

あらしの身に送る哀さ

聞き果てぬ夕の鐘に寝覚して

心敬（雑上・120）

夕の鐘に帰る山本

鳥の行雪の杉むらかすかにて

心敬

（冬・650、新撰菟玖波集526）

と、心敬自身の句と、心敬の句の前句（作者不明）の二例がとりあげられており、『新撰菟玖波集』も三例中一例が『竹林抄』に見られた心敬の句であった。こうした状況は、心敬周辺でこの語句が頻用されたことを思わせよう。

心敬が正徹に師事しはじめたのは、『ひとりごと』や『所々返答第一状』の記述から、永享元年（一二四二）あたりとされ、文安、宝徳年間からは交渉も頻繁となり、長祿三年（一二五九）の正徹没まで師弟関係は続いている。彼は、直弟子といった扱いではなかったようであるが、正徹やその門下の僧、和歌を正徹に学ぶ畠山氏の被官の武士たちと行動範囲、交友範囲が重なっている。『ひとりごと』には、都における在々所々の月次の会、また歌連歌の作者として、畠山匠作（賢良）、武田大膳大夫（信賢）、小笠原備前（浄元）といった、『草根集』に見える正徹が参加した歌会の主催者の名が記されて

いるし、同集70歌の詠まれた会を催した僧円秀は『落葉百韻』に参加している。「夕べの鐘」という表現は、心敬の現存する和歌には用いられていないが、連歌には用いられており、正徹との間で、作歌、作句表現の影響関係は充分考えられよう。

### 三

日没時、時を知らせるためにつく鐘を指す表現としては、「入相の鐘」が既に存する。この表現は和歌、連歌共に「夕べの鐘」よりもはるかに多用されており、例えば、心敬の用例としても、

積りし暮は数も覚えず

罪を消つ入相の鐘の声々々に

心敬（竹林抄・雑下・119）

昨日より風さへよはる年こへて

永祥

入相の鐘のかすむ明ほの

心敬

（河越千句第三百韻・52）

などがある。「入相の鐘」は、七音であり、助詞が必要な場合には字余りになる。だが、「山寺の入あひのかねのこゑごと」にけふもくれぬときくぞかなしき」（拾遺集・哀傷・よみ人しらず・120）、「山ざとのはるの夕暮きて見ればいりあひの鐘に花ぞちりける」（新古今集・春下・能因・116）等、著名な和歌の「入相の鐘」を含む句の部分は

字余りであり、この語句に関わる字余りは創作において全く問題にされてきておらず、この意識は心敬も同様であった。勿論、「夕べの鐘」の方が助詞を用いた時に、字余りにならずすんなりと句になじむことはあるであろう。また、『落葉百韻』の付合では「墨の袖」との言葉の縁から「ゆふべ」が選択されてもいる。そうした関係も考えられるのだが、なぜ心敬は「ゆふべの鐘」を「入相の鐘」以外に、意識的に採用し、さまざまな句に用いているのであろうか。

それでは、心敬は、「鐘」を表現した和歌や連歌をどう詠んでいたのかを検討してみる。

おぼつかないづちより来ていづくにか行らん鐘の夕暮の声

(心敬集・応仁二年百首・無常・273)

「心敬集」273歌は、空間に広がっていく、夕暮れ時の鐘の音のとらえどころのなさを「無常」題にて詠む。<sup>註13</sup>『徒然草』二百二十段にも「凡鐘の声は黄鐘調なるべし。是、無常の調子、祇園精舎の無常院の声なり」とあった。夕暮れ時の鐘の音のゆらめき、消長を詠む歌は、

京極派和歌に「たえだえにかねのひびきもまじるなりあらしのまつゆふぐれのこゑ」(伏見院御集・鐘疎・106)、正徹に「淡と消ぬ興津しほあひによび出づる鐘のみさきの夕暮の声」(草根集・鐘声何方・736)など先例がある。正徹歌は「和歌の浦や沖つ潮合に浮かび出づるあはれ我身のよるべ知らせよ」(新古今・100・家隆)を本歌と

しており、家隆の歌では泡沫の様子に我身のよるべない様が重ねられていたが、正徹歌では夕暮れの鐘の音が重ねられている。これはそのまま、「無常」題で示された心敬の意識につながってくるものであろう。

さらに連歌では、鐘のひびきを次のように詠む。

うき身に今日もくらすはかなさ

世中を思へば鐘のひびきに

此世の幻化まぼろしの、きたりしかた、される所もしらぬは、さながら鐘よりいでたるひびきの、ゆくゑもしらぬに似たると也、十縁生六喻経などの心を、一句のうちに、申しあらはし侍る歟。<sup>註16</sup>  
(芝草句内岩橋上)

はてしらぬ旅をおもへる暮ごとに  
きのふの鐘やひとの世の中

これも、万法のしばしもとどまることのなきを、昨日のかねのこゑのごとしと也、まことに諸法は昨日のかねのごとく、二たびかへる事侍らず哉。<sup>註17</sup>  
(芝草句内岩橋上)

このように鐘の音をとらえる姿勢は、例句(「世中を思へば鐘のひびきに」)の自注により、この世の出来事の、生起しました過ぎ去るありさまを、鐘の響きにたとえて考えることがふさわしいとする思いから来ていることがわかる。自注に言う「十縁生」とは、「[天日経]

住心品の十縁生句、幻・陽焰・夢・影・乾闥婆城・響・水月・浮泡・虚空華・旋火輪の譬喩であり、「六喩」は『金剛般若波羅蜜經』の六喩「一切有為法 如夢幻泡影 如露亦如電 應作如是觀」<sup>注18</sup>にある夢・幻・泡・影・露・雷であり、世のさまを表す鐘の音は、「幻」にたとえられているわけである。<sup>注19</sup>

こうした、鐘の音の消長に無常を感じる心敬の思いは、他にも『熊野千句』第二百韻の次のような付合

黄昏にそこともわかぬ鐘なりて 行助

時うつり行世こそ夢なれ 心敬

に見てとることができ<sup>注20</sup>。即ち、心敬は時のうつり行く世のありさまを夢のようと思い、それを黄昏の暗さの中でどこから聞こえてきたともわからない鐘の音に感じたとして、付けているのである。寛正三年二月二十七日張行の何人百韻における付合

はや長月は冬のおもかげ 行助

一とせの夢や鐘にも覚ぬらむ 心敬

も、早くも過ぎた一年の月日を鐘により「夢」にたとえて思い返す。心敬にとって鐘の音は、おぼつかないもの、行方のわからないものであり、その響きの特性が、幻とも夢とも思われる、年月と共に変わりゆく世の無常なさまを想起させるのであった。

さらに考えて行くと、彼にとって、鐘の音はどのようなメッセー

ジを内包し伝えんとしてるのであろうか。聞いた時に、意味を持ち、心情に訴えかけてくるように思われる音を「声」と表現するのだが、鐘の音は当然のことながら、一般に仏道の教えを表現する音とされる。例えば、「のりのこゑにき、ぞわかぬながき夜のねぶりをさますあか月のかね」（玉葉集・釈教・736・高弁上人）等があり、連歌では『新撰菟玖波集』に次の付合がある。<sup>注22</sup>

聞き知らぬ耳にも触れよ法の声

夕べの鐘に帰る釣舟 （雑一・701・権大納言実隆）

さらに、先に見た『竹林抄』に採られた心敬の付合

積りし暮は数も覚えず

罪を消つ入相の鐘の声くゝに

も、西行の「たのもしなよひあかつきのかねのおとものおもふつみもつきざらめやは」（山家集・恋・711）を意識し、恋の前句から句境を釈教へと転換しており、恋のものの思いの罪を消し、釈教の道に誘う鐘の声を詠んでいる。

そして、こうした中、『心敬集』には次のように詠まれた和歌があった。

おのづからむなしき法を唱ふらし夜深き鐘の遠近の声

（心敬集・夜釈教・358）

「むなしき法」とは、『般若経』のことであり、心敬は、応仁二年百

首でも「大空をたゞ我物と思ふ哉むなしき法を占むる心は」と詠み、やはり「むなしき法」で空観を表現していた。彼は、鐘の声は、仏道の中でもとりわけ空の教えを唱えているととらえているのである。<sup>注24</sup>

これは、心敬独吟何路百韻（成立年次不詳・発句「心あらば今をながめよ冬の山」・東北大学附属図書館蔵）にも

鐘ひゞく日影や更に過ぬらん

けふをもしらず空し世中

果もなく我あらましを急ぐ旅

との句の連続があり、鐘の響きに世のむなしさが想起され、むなし世を生きる自らの生をたどって出家への思いを詠むことから確認できよう。

心敬が、「世中を思へば鐘のひゞきにて」の自注で引いていた『大日経』の十縁生も、先に成立した『般若経』の内容を受け継いだものであり、心敬が鐘の声に感ずる仏道思想は、とりわけ『般若経』<sup>注26</sup>の示した空の思想なのであった。

#### 四

次に心敬句における「涙とふ聲」という表現を考える。「涙とふ」

は、鐘の聲が泣き濡れている私の袖の涙を訪れてくるという意である。鐘が「とふ」という表現は、例えば「ひとりねのこよひの霜はいかにとも鐘よりほかのとふ人もがな」（壬二集・冬暁・幽）のように詠まれているが、「涙とふ」という語句の従来の用法は、「まちわびて深けゆく月の影のみやねぬ夜の袖の涙とふらむ」（新後撰集・恋三・法眼兼誉・986）のように、月光が袖の涙を訪れる形容であり、鐘と結ばれた和歌や連歌の例は非常に珍しい。心敬の句は、鐘音が「とふ」以前に涙にくれていることを示唆しているのであり、これはなぜなのであろうか。

ここで、あらためて当該付合をみると、

あらましにさそはれそむる墨の袖 正頼

ゆふべの鐘の涙とふ聲 心敬

であった。類似の付合として、

あらましの身に送る哀さ

聞き果てぬ夕の鐘に寢覚して 心敬

（竹林抄・雑上・120）

あらましのみにとをき山のは 修茂

けふも聞うき身を鐘にはぢもせで 心敬

（河越千句第二百韻・37）

があげられる。「聞き果てぬ」の句は、「聞き果てぬ夕の鐘」、そし

て「鐘に寢覺して」と、夕べの鐘と暁の鐘の意を重ねて使用する事により、夕暮れから次の朝までの夜の時間を示す。出家がかなわな  
いままに、鐘から鐘までの夜の時間を無為に過ごしているそのなさ  
けなさを「哀さ」とするのである。「けふも聞く」の句は、やはり仏  
道に入りたいと志してはいてもかなわず、仏の教えには遠く隔たつ  
ている自分を「うき身」とし、そんな身のままでうかうかとすこし  
ている時の経過を「けふも」で表現している。この句では、「はぢも  
せで」鐘を聞いているとしながらも、その実、内省し強く恥じてい  
ることを示唆している。こうした付句の表現から、鐘を聞く身の側  
に、俗身のままに時の流れの中ですこす自らの歩みを思う悔恨の気  
持ちがあるとされていることがわがらう。

当該付合では、正頼の句は、「出家せねばという思いに動かされて  
僧となる」と、本懐が遂げられるように詠んでいる。正頼の句にあ  
る「墨の袖」とは、出家の身、特に僧位僧官などに関係のない僧と  
してのありさまをさすと思われる。だが、たとえ出家している状況  
を詠む句を受けたとしても、僧であれ俗人であれ、仏道を慕う人と  
しておのれの人生の時間を悔やみながらふりかえっている、その思  
いが心敬の句表現の根底に存している。鐘の音は、既にあるそうし  
た心の内の思いに対して新たに訪れてきて、自らに付随する仏教的  
な要素を示し、さらなる思いをかき立てて加えるという働きをして

いるものなのであった。

このように考えてくると、心敬の句には、鐘の音を受け止めた時  
にそれに応じる心の内面の存在が感得される。

鐘の音の「とふ」様子に、「とふ」を受けて応じる思いの存在をはっ  
きりと表現した和歌として、管見では、正徹に、長祿二年（一四五  
八）二月八日に詠まれた次の一首がある。

枕とふ暁のかねの声たえてこたへん方もなき思かな

（草根集・曉鐘・1027）

この時、正徹の和歌からは、次のような西行の和歌が思い出される。

あかつきのあらしにたぐふかねのおとを心のそこにこたへてぞ  
きく  
（千載集・雑中・題不知・119）

この歌は西行が『御裳濯河歌合』三十一番左に自撰しており、俊成  
も「殊に甘心す」と勝たせた歌。心の底から鐘の音に感応していく  
姿勢は、「とふ」鐘の声には、自らの思いが「こたふ」ることを前提  
として詠む正徹の姿勢に重なる。さらに正徹は「とふ」と鐘の音を  
表現し、「とふ」「こたふ」という鐘の音との交流を明らかにしてい  
るのである。なお、夕暮れ時の鐘の和歌に用いられた「とふ」「こた  
ふ」の対比表現は、

暮れはつるあらしのそこにこたふなり宿とふ山の入相の鐘

（続千載集・羈旅・題しらず・812・永福門院）



に既に見られる。京極派和歌は、「ゆきくれて宿とふ山の遠かたに  
しるべうれしきいりあひのかねをしるべにてけふのやどとふみねのふるて  
びきくるいりあひのかねをしるべにてけふのやどとふみねのふるて  
ら（伏見院御集・寺・幽）」のように、入相の鐘が、夕暮れ時に一夜  
の宿を求める（「宿とふ」）旅人が人家の在処の見当を付けるよすが  
となるというモチーフを詠んでいた。永福門院歌は、このモチーフ  
の中にさらに「とふ」「こたふ」の相対を組み入れ、鐘を「こたふ」  
と感じ受け止める人と鐘との交流を表現した巧みさを持つていた。  
正徹の歌は、永福門院歌同様、鐘の音と人との相互の交流を詠みな  
がら、永福門院歌とは相違して鐘音の「とふ」状況を詠むものであ  
り、この点は、暁の鐘ではあるが、心敬の句の状況と共通する。そ  
れゆえ、ここにもやはり正徹の詠歌表現の心敬への影響を考えるこ  
とができよう。<sup>注28</sup>

## 五

夕暮時は、光がかげり薄暗くなる時間帯であり、それによって触  
発される物思いにふける時とされるが、心敬の作品においてはどの  
ような思いが詠まれているのであろうか。

例えば、寛正四年六月廿三日張行の唐何百韻<sup>注29</sup>に次のような付合が

ある。

あらましにのみ年はへにけり 道賢

おもひつゝたゝながむるは夕にて 心敬

この付合では、前句の出家をしたいという長年の願望のモチーフを  
受け、夕暮れ時に、すべなく物思いにふけるさまが詠まれている。  
この時、付句は、仏道の教えに遠い自らのありさまを思い返し悔恨  
の念にとらわれる様子となる。

また、何木百韻<sup>注30</sup>（成立年次不詳・発句「雪の折かやが末野は道も  
なし」・天満宮文庫蔵）には

心無人の夕はむなしくて 宗悦

すゝむる鐘を哀ともきけ 心敬

とあり、「こころなき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の  
夕暮」（新古今・秋上・362・西行）により、前句の「心無」と「夕」  
に、「哀」を付けている。西行歌の影響の下、「ひたすらに心なき身  
の秋ならばゆふべの空に物はおもほじ」（新続古今集・秋上・426・中  
納言為藤）等の数多くの和歌に、秋の夕は特別に感深い時と意識さ  
れているのは論をまたない。心敬は、西行歌のイメージの色濃い夕  
べを詠む前句に、仏の教えを伝える鐘の音を付け、仏道へといなさ  
うのである。心敬も秋の夕へのすばらしさを評価していたことは、  
『心敬有伯へ返事』で

幽玄体は心にも云ひ顯はし難く、秋の夕の俤の色もなく声も無が如し。しかはあれど、あはれ知人の心にはしみとをり侍る如し。

と述べ、幽玄体の連歌について説明する際に具体的な様相としてとりあげていることでわかる。これは、無名抄の「幽玄の体」の説明の例示部分「たとへば、秋の夕暮れ空の景色は、色もなく声もなし。いづくにいかなる故あるべしとも覚えねど、すゞろに涙こぼるゝ」とし」を念頭に置いたのであらうと推定されているが、そうした先行の歌論を咀嚼し、それに賛同した、目にはつきり見える景物もなく、物音もない秋の夕べのさまこそが、あはれを知る人に感動を与えるとする考えが示されている。また、この「色もなく声も無が如し」という形容は、『金剛般若経』の

若以色见我 以音声求我 是人行邪道 不能见如来

という、仏の姿、形をもって仏とみなしてはならないとの教えの表現から来ている。心敬は、形容し難くも存する夕闇の世界に、空観による世の実相の把握を重ね観じており、それが最もよく感じられる時が秋の夕べと感じていたのである。

世の無常のありさまを思うという心敬の姿勢は、文明二年（一四七〇）七月に兼載に与えた『岩橋』の跋文で

此世の無常遷変のことはり身にとをり、何の上にも忘ざらん

人の作ならでは、まことには感情あるべからず。詞は心の使といへり。げにも只今消え侍らん此身の不思議を忘れて、有相道理の上のみの作にては、ふとり結構なるも理ならずや。

と述べることで、句作の根本に存するものであることがわかる。寛正四年の著作である『ささめごと』（草案本系統）においても、「尊宿の語り侍りし。いづれの道もおなじ事に侍れども、特に此の道は、感情・面影・余情をむねとして、いかにも言い残し理なき所に幽玄・哀れはあるべしとなり。」と「感情」を句のめざすべき姿の条件にあげると共に、言葉では説明しえない秀歌の様子を次のように表現する。

#### 定家卿詠

秋の日のうすき衣に風たちて行く人待たぬすゑのしら雲

#### 清岩和尚歌

秋の日は糸よりよわきさ、がにの雲のはたてに萩の上風

これらの秀歌、まことに法身の體、無師自悟の歌なるべし。言葉にはことわりがたかるべし。巫山の仙神女の姿、五湖の煙水の面影は、言葉にはあらはすべからず。

若以色见我 以音声求我 是人行邪道 不能见如来

我覚本不生 出過語言道 （諸過得解脱） 遠離於因縁 知

空等虚空

ここでは、すばらしいけれども、言葉では説明できない秀歌の様を、秋の夕の説明と同じ『金剛般若経』の偈と、『大日経』の偈とで表現せんとしている。両経は「世中を思へば鐘のひびきにて」の句の自注にも引かれていた。秀歌の理解を偈によって示す姿勢は、歌道・連歌道と仏道とを同一視する心敬の考え方の根源を示さう。<sup>注34</sup>『金剛般若経』『大日経』が教える、無常を理解し、空観による世界把握をなす姿勢は、心敬の創作の根源に存し、「夕べの鐘」の句を生み出していたのであった。

## 六

鐘の音をモチーフとした心敬の表現は、正徹の詠歌技法の影響を色濃く受けるが、鐘の音の響きはじめる前の空間を表現に織り込み、そこから和歌、連歌の世界の時を始めるという独自の視点の作品が見受けられる。『落葉百韻』の彼の句には、「夕べ」という時にあって、自らの内面を仏道思想に照らし見つめ返している心に、鐘の音のもたらす仏の教えの内容が、あらためて響いてくることが表現されてきた。

これに対し、正徹の歌はどうか。彼の歌にも、  
しづかにて夕の鐘のことはりをき、いる、人や涙おつらん

（草根集・晩鐘・254）  
のように、心敬と同じく夕べの鐘の音の届ける仏教思想を詠みこみ、音により感情が生み出されるさまを詠んだものがある。類歌としては、

そことなきゆふべの鐘のとをきにも先昔よと思ひいでつ、

（草根集・夕鐘・480）

があり、鐘の声の消えた後にたゆたう心情を感じさせる歌に

夕暮の心の色をそめぞをくつきはつる鐘の声の句ひに

（草根集・夕鐘・481）

がある。そして、正徹の最晩年にあたる長祿二年七月十七日に詠まれた和歌に

鐘もたえ風も音せぬ夕暮の心にやどをかるこゝろかな

（草根集・夕幽思・1047）

があつた。この歌に至り、鐘や風の「音」もなくなり、薄暗く「光」もなくなりかけた夕暮時に、心の中にも思いが入りこんでいく様を詠む。だがいずれの歌も示しているように、正徹の関心は鐘の音が鳴っている期間と音の消えた後に向けられ、響きの消失にともない立ち現れてくる世界が詠まれている。

だが、心敬は、鐘の音が響く前、夕暮れ時になった世界を意識している。心敬には、夕暮れであることの、心への影響への関心が強

くある。それは彼が夕暮れ時を、最も仏の教えによりそうことのできる、それゆえに幽玄な思いに心を染めることのできる時と考えていたからであった。夕暮れ時にわきいづる心性の世界に新たに働きかける要素として、鐘の音を迎えいれ、その響きが心の中に起こす波紋を見つめ詠みいだしたのである。

論中の和歌の引用は特に断らない限り『新編国歌大観』による。

## 注

注1 『連歌貴重文献集成 第四集』(昭和五五・勉誠社) 所収。

注2 伊藤伸江・奥田勲「本能寺蔵『落葉百韻』訳注(一)付、落

葉百韻翻刻及び解説」(『愛知県立大学日本文化学部論集国語国

文学科編第一号(文学部論集国文学科編通巻58号)・二〇一〇・

三)において考察した。

注3 心敬の和歌・連歌の実作における「鐘」の用例に関しては、

菅基久子氏の論と、それをもふまえた稲田利徳氏の先行研究が

ある。菅基久子「心敬 宗教と芸術」(二〇〇〇・創文社)、稲田

利徳「心敬―仏教思想と作品―」(仏教文学講座第四卷「和歌・

連歌・俳諧」(平成七・勉誠社)。

注4 『連珠合璧集』の引用は『連歌論集一』(昭和六〇・三弥井

書店)による。

注5 『連珠合璧集』の「墨染」の項に、「衣袖などにいふべし。

又只墨の袖 墨の衣ともいふ。」と説明される。

注6 『草根集』の引用は『私家集大成』第五卷所収日次本系統の

書陵部蔵御所本による。私に清濁を付した。

注7 『竹林抄』の引用は新日本古典文学大系『竹林抄』(一九九

一・岩波書店) 所収野坂元良氏本による。

注8 「清石和尚に、卅年は日夜の事に侍しかども、一の事をも耳

にとゞめず、いさゝかの悟を得侍らざりし。今は、千たび悔ひ、

足摺をして侍るばかりなり」(『ひとりごと』)、また「三十年の庭

訓」(『所々返答第一状』)との記述による。

注9 稲田利徳『正徹の研究』(昭和五三・笠間書院) 第一篇第三

章第五節「正徹と心敬」。稲田氏は、この論において、『草根集』

における心敬の名の登場は宝徳二年であることを指摘し、心敬

が『所々返答第二状』で述べる三井寺仏地院での十四ヶ度の歌

合も宝徳年間ではなかつたかと推定され、両者の交渉が文安・

宝徳年間頃から頻繁になったであろうと推定されている。

注10 稲田氏は注9論で、例えば『草根集』での心敬に関する表現

「権律師心恵といふ聖」等から、正徹側の心敬に対する意識が疎

遠なものであったことを述べる。

注11 文安三年正月二十日には、畠山修理大夫入道賢良の月次歌会があり、『堯孝法印日記』によって正徹と心敬の同席がわかる。

また「ひとりごと」は歌連歌の作者先達として「畠山匠作・同名阿波守・同名左衛門佐・一色左京大夫・武田大膳大夫・小笠原備前入道」と述べ、心敬とこうした人々の近さが類推される。さらに『落葉百韻』の連衆には、正徹と懇意であった清水寺の僧円秀や、和歌を正徹に学び、連歌では心敬に指導をおおいだ僧伝芳、畠山氏の被官井上忠英らがあり、正徹と心敬の属した文化圏が現実にならなっていることがわかる。

注12 『河越千句』の引用は古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）

所収内閣文庫本による。私に清濁を付した。

注13 『心敬集』の引用は和歌文学大系『草根集 権大僧都心敬集

再昌』（平成一七・明治書院）による。

注14 第三句は類題本では「うかび出づる」である。

注15 『徒然草』の引用は新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』

（一九八九・岩波書店）による。

注16 『芝草句内岩橋上』の引用は、『心敬集 論集』（昭和二二・

吉昌社）による。私に清濁を付した。

注17 稲田氏注3論文。また湯浅清『心敬の研究』（昭和五二・風

間書房）第二章第四節「無常」にも引かれる。

注18 『金剛般若経』の引用は岩波文庫『般若心経 金剛般若経』（一九六〇・岩波書店）による。

注19 この点について、稲田氏は、注3論文において273歌は「無常は鐘の音だけでなく、自身をも含めたあらゆる存在を「幻化」と認識し、その来し方、行く末を知らぬ不定を詠嘆しているとみてとれる」とする。聞くべき見解であろう。

注20 『熊野千句』の引用は古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本による。

注21 当該百韻の引用は貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（昭和四

七・角川書店）による。私に清濁を付した。

注22 『新撰菟玖波集』の引用は、『新撰菟玖波集全釈』底本である筑波大学蔵本（ル二二〇―三四）による。

注23 例えば、寂然の『法門百首』94歌注に「般若には空の理をあかせば、むなしき法とは云ふなり」とある。

注24 稲田氏注3論文にも言及される。

注25 当該百韻の引用は貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）による。私に清濁を付した。

注26 櫻岡寛『般若経』（岩波講座日本文学と仏教第六巻 教典）

（一九九四・岩波書店）参照。なお、櫻岡氏は、中世の文学作品

においては、空観を説く『金剛般若波羅蜜經』の喩が無常を表すものとして混同されて使用されることが多くあると述べられる。心敬作品もその一例か。

注27 『草根集』永享二年十二月三日詠の詞書に「海印寺の僧正、弟子の持宝禪師に華嚴宗管首などゆづりて、ひたすら墨の袖のやうになりて、萱ぶきの所作てかたはらにこもりゐられたるよし聞き侍りて、まかりとぶらひし」とあり、「墨の袖」は僧綱と関係がない遁世のありさまをさすかと推定される。

注28 正徹には「月のとふ霜夜の夢をさめねとや枕うこかす暁の鐘」(草根集・卷五・寒夜月・惘)という、月が訪れることと鐘が音をたてて訪れることを同時に詠む和歌もあつた。光と音(音波の振動)を共に訪れるものととらえている、こうした点も、「涙とふ」を鐘のなすわざとした心敬の表現に近く、注意すべき類似の詠歌表現かと思われる。

注29 当該百韻の引用は貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』(昭和四七・角川書店)による。私に清濁を付した。

注30 当該百韻の引用は貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』(昭和四七・角川書店)による。

注31 『心敬有伯へ返事』の引用は木藤才藏校注『連歌論集三』(昭和六〇・三弥井書店)所収大阪天満宮藏長松写本による。

注32 木藤才藏氏による『連歌論集三』(昭和六〇・三弥井書店)頭注。

注33 岩橋跋文の引用は、木藤才藏校注『連歌論集三』(昭和六〇・三弥井書店)所収本能寺本による。

注34 木藤才藏氏は、「姿言葉つかひの幽遠の句」の説明を、これらの偈文でしめくくつたのは、真にすぐれた和歌連歌は、感覚や思量では把握し切れない如来の本体、それは言語の表現を超えた不生不滅で空の境地を体感させるようなものでなくてはならない。ということを説きたかつたのであるう。」と述べる。  
(同氏「数奇と道心―正徹と心敬の場合―」(『佛敎文学』第20巻・一九九六・三))

〔付記〕この論は、科研費基盤研究(C)「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」による成果である。